
思い出が思うこと

かがアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い出が思うこと

【Nコード】

N5164A

【作者名】

かがアン

【あらすじ】

シュウの前に現れたのは死んでしまったカナ。なぜ自分が幽霊になったのかわからないので、親友であるシュウに助けてもらうために側にいることに。（取り憑いた？）それから2人？でカナが成仏できるように色々なことをやってみるが理由は・・・

第一話 唐突

「……シュウ！シュウ！」

どこからか声がする。聞き慣れた声だ。

「ん？」

俺は目をあけた。

目の前によく知っているカナの顔があった。

「わっ！！カナ！びっくりせんなよ。」

すると顔を引き笑顔で、「おはよう」と言った。

「おはようって今何時だよ……！！」

時計は8時10分を指している。急がないと遅刻だ。

バタバタと慌てて着替え始める。

…俺は^{さえじましゅうへい}冴島秋平通称「シュウ」現在高校二年生。

…部屋にいたのは^{かつらぎわかな}葛城若菜通称「カナ」永遠の16歳。

って言ってもアイドルとかの決まり文句ではなく本当に永遠の16歳。

それは、彼女が死んでしまつて幽霊だからだ。

俺たちはこれから叶わない恋をすることになる。

しかし、その話しの前に俺たちの出会いから現在に至るまでを話そうと思う。

五年前、中学校に俺は入学した。

そこで俺が出会つたの若菜。

それと家村^{いえむらとよひこ}豊彦通称「ヒコ」と高倉^{たかくらりほ}凜穂通称「リホ」の四人だ。

俺たちは、知らない間に仲良くなった。

お互いに息が合ったのだらう。

気が付くといつも四人で過ごしていた。

ボケがカナで、ツッコミが俺。

笑うのがヒコで場を収めるのがリホ。

テンポよく、毎日を過ごしていた。

時間は経ち、すぐに受験になった。

俺たちは四人とも近くの高校に決めた。

偏差値は高過ぎず低過ぎず、別に荒れてない。

極々平凡な学校だ。受験後はヒコが「やばい…」と半分泣き顔で言っていたが、

なんとか四人とも合格することができて、

泣きながら喜んだ。

それから数ヶ月後俺たち四人は無事入学式を終えた。

クラスは俺とカナとリホが同じでヒコだけがクラスが違ってしまった。

このまま何事もなく時が過ぎていくと思っていた。

そんな矢先：カナが死んでしまった。交通事故だった。

第一話 唐突（後書き）

全然楽しくないってのが自分が思った感想でした。
「なら載せんや」ってきつい言葉はご勘弁です。
これから頑張って楽しくしていくつもりです。

第二話 ヒコ

「カナが死んだ」

そう聞いたのは事故から一時間後のことだった。

俺は突然過ぎて理解できず、実感がわかないまままだ呆然とその事実を聞いた。

それからすぐにカナの葬儀が行われたが涙はでない。

葬儀場にはたくさんの人が訪れていてカナの慰霊を見るなり泣き崩れる人もがいた。

それでも俺の涙は一向に出る気配がなかった。

それから二日が過ぎた。

さほど変わらない日常・・・

カナが死んだことを実感したのは学校でのことだ。

「今日ヒコは？」

小学校時代から皆勤を取り続け、元気だけが取り柄なヒコが学校を休んだ。

「……………」

反応がないリホ。

「ありえないよな！ヒコが休むなんて！なあカナ・・・」

俺はつい振り返ってしまった。

いつもいるハズのカナがそこにいなかった。

そのとき俺の目から自然と涙がこぼれ落ちた。

俺とリホはその場で立ち尽くしてしまった。

その日の帰り道、無言のまま二人でヒコの家に向かった。

「ピンポン」

玄関のチャイムを押すとヒコのおばさんがでてきた。

「あら、秋平くんに凜穂ちゃんじゃない。どうかした？」

普段とまったく変わらないおばさんの態度に2人は顔を見合わせた。

「あの、豊彦いますか？」

リホがそうたずねると、

「あれ？聞いてないの？今日から部活で遅くなるとか言ってたわよ。」

また顔を見合わせた2人。

「どうかしたの？」

おばさんが不思議そうに聞いてくる。

どうやらヒコが学校を休んだことを知らないみたいだ。

「実は今日、ヒコが学校を」

「いえ。何でもありません。部活のこと聞いてなかったの。校門で待っていたんですが、中々来なかったのので先に帰ってしまったんじゃないかって、明日会ったらシメときます。」

「ごめんなさいねえ、後からちゃんと言っておくわ。」

そのとき俺は、なぜヒコのおばさんに休んだことを言わないのかリホに疑問を抱いていた。

第三話 気絶

その帰り道、無言のまま二人で歩いていた。沈黙に耐えられず俺は口を開いた。

「なあ…なんでヒコが学校に来てなかったことおばさんに言わなかったんだ？」

「きつと…ヒコにも何か考えがあるんでしょ。私達にすら隠してたんだから。」

「そっか…」

再び無言で歩く二人。すぐに十字路に着いた。リホとはココから道が違う。

「じゃあまたね」

そう言つてリホが帰っていった。

俺が振り向き自分の帰り道をみると、制服を着た女の子が奥の曲がり角を曲がっていった。

「…カナ？まさかな……」

まさかカナが居るはずはない。そんなことはわかっていた。けれども体は動き、走り出していた。

「ありえない。カナは死んだ…。死んだんだ！」と心に言い聞かせる。

曲がり角に着き道を見るが誰もいない。

「そ、そうだよな。居るはず…ないもんな。」

家に着き「ただいま」と階段を上がり自分の部屋に入った。ベットにすわり、ゆっくりと荷物を降ろす。

「カナ……」

俺の目に涙が込み上げてきた。

「ん？呼んだ？」

聞いたことのある声が後ろから聞こえた。振り返った俺は…

「ンン！！！！！！！！！！」

自分で自分の口を抑えて、叫んだ。

何が起こったのか理解できなかった。

とっさに元にもどる。

「シュウ？」

心の中で俺は思った。夢だ。これは夢なんだと。

そして頬をつねる。痛い。しかしまだ信じられない俺は、反対の頬を殴る。

「ねーシュウ！」

痛い。痛い。・・・ん？コレは幻だ。振り返る俺。

「もー話聞いてよー！」

そこにはカナがいた。私服姿で、ベットに座っている。俺の知っているカナがそこにはいた。

「カナ…なのか？」

「うん」

「カナなんだな？」

「うん」

「お前死んだんじゃ……」

「うん」

「だよな・・・っえ？」

数秒間の沈黙の後。

「なんか私、幽霊になったみたい。」

それを聞いたシュウは取りあえず…気を失った。

第四話 部屋

世界は広い。確かに広い。・・・しかしその広い世界の中でこんなことがあるのあろうか。

今俺が置かれていている状況は、自分の家の自分の部屋の自分のベッドで横になり、目を瞑っている。

正確な時間はわからないが俺は気を失っていた。

そして気がついた。しかし目は開けなかった。いや、開ける勇気が無かった。

俺が気絶した理由は・・・カナ。

俗に言う幽霊つてやつだ。

確かに俺はカナが死んだことを聞いた。

葬式にもでた・・・やはり幽霊だ。今さっきカナが見えた。そして喋っていた。間違いない。ただ時間だけが過ぎていくと思った俺は決心し、そつと目を開けた。しかしそこにカナの姿はない。

後ろを見るがやはりカナの姿はなかった。

すっかり安心した俺は、一階に降りて夕食を済ませ風呂に入った。

きつと何かの見間違いと聞き間違いだろうと考えることにした。

人間とは不思議なものだ。理解できないことは理解できることに勝手に解釈してしまうのである。

俺は再び二階の自分の部屋の前でパジャマ姿で立った。そのときはつきりと見えたカナの姿が脳内に甦った。

「いるかな・・・いないよな・・・。」

意を決して部屋のドアを開けると・・・

「よっ！」

とセーラー服のカナが部屋の真ん中で手を振ってたので反射てきに

「よお」

と返事をしてしまったがとりあえずドアを閉めた。

そして深呼吸をしてから俺はもう一度部屋に入った。

俺はイスに座りカナはベットに座っている。

「シュウ・・・驚かせてごめんね。なんか私、幽霊になったみたいなの。何か未練とかあるのかな?？」

「みつ未練って・・・。」

こうして、幽霊になった永遠の16歳のカナとまだ生きている一般学生の16歳のシュウ二人?が再び出会ったのであった。

第五話 学校（1）

あれから二日がたった。

今日は金曜日だ。どうやら今日はカナが学校まで着いてくるらしい・・。

俺が朝食を食べているとソコにカナが飛んできた。というより浮遊してきた。

「シュウおはよう」眠たそうなカナが俺の近くにくる。

「おはよ。って幽霊も眠るなんだな」知らなかった。そうだ！幽霊の実態を本にして売り出したら・・。

「ん？シュウ？」

俺はアホか・・そう思った。

「ん」幽霊も寝るのかな・・。

「何寝ぼけてんだよ。カナのことだろうが！それより今日は学校行くんだろ？」

「うん・・あつそうだった！」

そこに母さんがやってきた。

「秋平？秋平？さつきから聞いているの？もう学校の時間ですよ。1人でブツブツ言っていないで早く行って来なさい！」

時計を見るともう8時

「やばっ！じゃあ母さん行つて来る！」

「あつ待つてよお」

玄関の閉まる音がした。

「どうも最近独り言が多いのよねえ。なにか危ないことしてなければいいけど・・。」

通学路

まだ桜が咲き通学路を綺麗に彩っている。

そこを歩く二人？1人は真新しい制服にかばん。

片やもう1人も真新しい制服だが、宙に浮いてる。

宙に浮いている子が話し出す。

「ねーシュウ。」

「ん？どうした？」

ふわりとシュウの前に移動する。

「私のこと・・・怖くないの？」

半笑い気味の顔で聞かれたシュウは立ち止まる事なく彼女の横を通り過ぎる。

「だってカナが幽霊って」

「あつ見て見て！あの桜の木おつきいね。」

苦笑いを浮かべるシュウ。

「だから怖くないんだよな。」

しかしカナにははつきり聞こえなかったらしい。ん？なんか言った？と言いながらこつちを向いた。なんでもないよ。と答えて走るぞ！と二人？は学校に向かって行った。

学校の校門

「変なことはしないでくれよ！」

俺はこの時、少し怖かった。

「変なことって何よ。」

彼女なら幽霊といえど何か起こしそうだからだ。

しかし心配し始めたらしきがない。

「よし！行くか」と学校に入ってしまった。

第六話 学校（2）

俺が下駄箱で靴を履き替えているとそこに奴が現れた。

「はあゝい皆さん。お・は・よ。」

でた。前口だ。

「奈緒ちゃんおはよ！あつ里美ちゃんおはよ！おおゝ満ちゃんも！」

あの朝から異常にテンションが高いのが前口^{まえぐちそうま}颯馬だ。家は金持ち。

容姿は微妙。性格は無類の女好き。身長は低い。

そして何故か前口の周りには女がいる。

あいつがモテる理由がわからない。前口は身長のことに触れるとどこにいても察知して、攻撃してくるらしい。

先輩がやられたという噂まである。

事実関係は定かではないが・・・。

俺は前口に見つからないようにこっそりと下駄箱を抜けようとしたところだ。

「あつこれはこれは冴島くん。おはよう。」

げ。見つかった。俺は一秒でも早くその場を離れたかったが遅かったみたいだ。

「確か冴島くんは葛城さんと仲が良かったんだよね。」

「ああそうだけど。」

「葛城さんのことは聞いてるよ・・・。」

と前口が悲しげな顔をした。

確かに前口は軽くて女好きだけどこの気持ちは本物なんだろうと思っただ。

「ごめん。なんかしんみりさせちゃったね。アハハハッ」

「で、なんか用事？」

「あつそうそう！こーれ！」

と一枚のピンクのレースがついたハンカチを差し出した。

「何これ？」

俺はまったく見覚えがなかった。そのとき横で浮いていたカナがそのハンカチを見て言った。

「あっコレって私の!」

「えっ?今葛城さんの声が!」

あたりをみまわす前口。

「確かに聞こえたんだけど・・・気のせいだよな。そうだよな。そんなわけないもんな。アハハハ。」

俺は少し慌てたが、とりあえずそのハンカチについて聞いてみることにした。

「そのハンカチが葛城の?」

「ああこれはね・・・」

俺はそのとき前口の溢れんばかりの笑顔と体から出ているピンクいオーラに引いていた。

「これはね!去年の夏!僕がたまたま道を歩いていたときだよ。向こうから歩いてきたのは、まるで天国から僕を迎えに来たかと錯覚するくらい真っ白なワンピースに身を包んだ美人なお姉様!俺はそのお姉様に早速声をかけたんだ。」

「それが葛城?」

「違う違う。僕がそのお姉様とお話していたんだが残念なことに僕と話が合わなくて。去り際にお姉様が僕を押していったんだ。そしてたら道端のドブに足が入ってしまい、急いで抜いてる上から盆栽が降って来て頭に直撃。倒れた俺の手を二、三人小学生が自転車ですひいていって、そのあと来た猫に顔を引っ掛かれたときにたまたま葛城さんが通ったんだ!」

「うん。で?」

「そのときに、大丈夫ですか?って一枚ハンカチを出してくれたんだ。」

とにやける前口。

「いやあ話はわかったけどなんか・・・」

第七話 学校（3）

「あのときの葛城さんはまるで天使！笑顔や一つ一つの動作が僕の心を癒してくれたんだあ」

と両手を広げてまるで羽ばたくかのごとく天を仰いでいた。

「うん。わかった。返しとくよ。」

と軽く受け流した。

「じゃあよろしく頼むよ！ちゃんと葛城さんのところに届けてくれよう。」

と言う声に全く反応せずに教室に向かった。

教室

「ねーシユウ？シユーちゃん！ウオッホン！その秋平くん！えくすきゅーずみい？もーなんで無視するのよー」

俺はカナを無視していた。あたりまえだ。

ここは教室で現在授業の真っ最中、俺以外にカナの声は聞こえない。俺が反応すれば確実に不審がられる。

しかしそれに気付いていないのか、カナは話しかけるのをやめようとしていない。

「あつペンギンマンだよ！・・・もー反応してよー」。

だから喋れるわけないだろうがと思った。そう、喋らなければいいんだ。

俺はノートの端に喋れない変わりに書いて伝えることにした。

早速喋れないことを説明し、用件を聞いた。

理由はヒコのことで、何故居ないのかを聞きたかったらしい。

俺も知らないが、家では学校行ってることになってると伝えた。

するとカナは今日会いに行こうと言い出した。

授業が終わると、俺はりホの机に向かった。

「なあ今日ヒコん家行かないか？」

本を読む手を休めてこつちを見る。

「だからこの間言っただでしょ？きつとヒコにはヒコなりの考えがあるんだって。」

落ち着いたままそう答えた。

「ならその考えを聞きに行くくらい大丈夫だろ？」

「ヒコはおばさんにも言ってないのよ？」

「だから余計に心配してんだよ・・・なあ？」

と右上に浮いているカナに同意を求める。

「ん？誰かいるの？」とリホが俺の後ろを確認するように覗くが誰も居ない。

明らかに失敗したという顔をしている俺をリホは追求の目で見てくる。

「いいついやあつその・・・うん。誰か居る気配がして。」

焦るな俺。落ち着け。落ち着け。

「で？ソコに誰かいたの？」

カナが浮いているところを指さしているが偶然だろう。

「エツツ！あたし？リホちゃん見える？？」

のんきに手を振っているカナを横目に気のせいだったと半ば無理やり誤魔化した。

第八話 理由（１）

放課後になり、途中まで一緒にリホと帰ることにした。校門を出ると桜もなくなり夏の準備に入る木々を見て、少し寂しくなった。

そのまま歩いて少し経ったとき、不意に手を入れたポケットの中にハンカチが入っていた。

今朝、前口がカナに返して欲しいと言って渡してきたものだ。

そうリホに言いながらハンカチを出そうとした瞬間、リホは俺を思いつき睨みつけた。

「私の前で二度とその名前を言わないで！ああ～虫唾^{むしず}が走る～！」

・・・リホは心の底から嫌がっているみたいだ。

何があつたのか聞きたいところだが今はやめておこう。

しばらくリホは機嫌が悪かった。

やっと落ち着いてきたところで、俺はもう一度ヒコの家に行こうと誘った。

だけどリホはくどいと言ってそそくさと帰ってしまった。

仕方なく、俺とカナの二人（？）でヒコの家に向かっていた。

「ねえシュウ？なんでヒコは学校の来ないんだと思う？」

俺もずっと考えていたが、結局何もわからなかった。

そのあとカナはヒコはきつと鳥になる練習をしているんだ。

とか、木とお話しに行ってるんだとか。

もう成仏してしまえ。そう思ってしまった。

そんな他愛もない話をしていたら、すぐにヒコの家に着いた。

何度も見ているが、今日は家がいつもと少し違って見えた。

柵を開けて玄関に向かう。

そしてチャイムを鳴らす。……………誰も出ない。

もう一度鳴らしてみるが……………やっぱり出ない。

どうやら留守らしい。仕方ないので今日は一旦帰ることにした。

「なんか居ないみたいだからカナ、今日は帰ろう。明日もう一度来よう。」

そう言って振り返ると、そこにはヒコのおばさんいた。買い物袋を提げている。どうやら近くのスーパーに行っただらしい。

「あら、秋平くんじゃない！どうしたの？」

聞かれた。俺がカナに話し掛けているところを。

なんとか誤魔化そうとするが何も出てこなかった。

しばらくの沈黙。するとおばさんが

「今日も豊彦は遅いみたいだけど、とりあえず上がっていく？」

と言ってくれた。俺は、じゃあお言葉に甘えて。

とヒコの家にお邪魔したのだった。

第九話 理由(2)

吹き抜けの天井から温かい日が差し込む。

俺はヒコの家の居間にいた。

奥のキッチンからは料理をしている音が聞こえてくる。

「ヒコの家に来るのって何年振りだろお」

と空中に浮いている幽霊のカナが言った。

さすがにもう信じているが、傍から考えたらありえないんだろうと思う。

簡単に言えばカナ……そう！この幽霊は俺に憑いている。

「シュウ？何難しい顔してんの？大丈夫だよ！すぐにヒコ帰ってくるから！」

とりあえず返事をして俺はヒコの帰りを待った。

それから二時間。

ガチャツ

「ただいま」

とヒコが帰ってきた。

ヒコと言いながら近寄るカナ。

当然見えないヒコはそのままカナの体を素通りしてこっちに向かって来た。

カナはエッチ！とか言いながらブツブツ言っていたので放っておくことにした。

ヒコが居間に着き俺に気が付いた。

凄く驚いていたがそこにヒコのお母さんが登場した。

「お帰り。秋平くん来てるわよ。」

戸惑っているヒコを目の前に何も言っていないよ、と一度頷いた。

ヒコは部屋で話すと言って俺を連れていった。

何年振りかに入るヒコの部屋。

壁にはサッカー選手のポスター。

机にはバスケの選手のフィギア。

本棚にはスケート入門の本。

一人用のベット、中央には卓袱台ちゃぶだいに似た机。

勉強してそうもない勉強机。そこに立っている写真立て。

そこに写っているいつもの四人。中学の卒業式が終わって卒業証書を持っている写真だ。

「どうしたんだよ急に！びっくりするじゃねーか」

ヒコはベットの上に座り服を着替え始めた。

俺は勉強机の椅子に座った。

いざつてなると何を聞いていいのかわからなかった。

無言のまま数秒が続く。

そのとき、ドアを通り抜けてカナが入ってきた。

驚いた俺はその場で急に立ち上がってしまった。

さすが幽霊。驚いた。と関心してしまった。

「もゝ置いてかないでよぉ。」

そう言いながら俺の方に飛んできた。

カナを目で追う。

「シュウ……どうした？」

ヒコは心配そうに俺を見ていた。

「大丈夫。ちょっとね。」と俺は苦笑いを浮かべてまた椅子に座った。

また無言のまま時間が過ぎる。

俺の頭の中にリ水の言葉が甦る。

「なあ。」「シュウ。」

喋りだしたのは同時だった。俺は「何？」とヒコに先を譲る。

「覚えてるか？中学の一年の時に行った社会見学。」

「なあそれよりがっこ……」

「覚えてるか？」

ヒコの口調が変わった。

俺は懐かしい思い出を記憶の奥から引っ張り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5164a/>

思い出が思うこと

2010年10月10日08時45分発行